軍部と大正政変　桂太郎と原敬

平成20年6月12日・高根台公民館

大正時代というと、どうでしょうか。大正天皇が病気がちで、在位期間十五年と短かった。そんなこともあって、明治の四十五年、昭和の六十三年に挟まれた「谷間の時代」といった感じがあります。太平洋戦争で一番多くの犠牲者を出したのも、この大正世代でした。大正の末に流行った「おれは川原の枯れすすき」とか「籠の鳥」といった、やるせない、もの悲しい響きの歌のせいでしょうか。何となく暗い、沈滞したイメージを連想します。ところがどうして大正時代は、どこにそんなエネルギーがあったのかと思うほど、大変たくましく、また多様な可能性を秘めた時代だったのです。

それを象徴する出来事が、これからお話する「大正政変」です。「大正政変」というのは、大正元年十二月から翌年の二月にかけて、わずか二か月余りの間に二つの内閣が倒れてしまった ― この内閣史上、前代未聞の政変劇ですが、明治天皇が亡くなり元号が大正に改まると、陸軍は二個師団、約五万人の兵力増強を強硬に要求してきました。ロシアの復讐戦に備えるため、どうしても必要だというのです。日露戦争に勝ったとはいえ、日本は外国から莫大な借金をしています。政友会の第二次西園寺公望内閣の時ですが、「財政上とても無理だ」とはねつけると陸軍大臣が単独で辞職してしまったのです。陸軍の要求を容れない内閣には、後任の大臣を送らない。陸軍大臣がいなくては、内閣を作れません。「軍部大臣現役武官制」、「陸海軍大臣は現役の大将、中将に限る」という既定を盾にとって、陸軍が内閣を倒した最初の例となりました。この規定は、いわば軍部が内閣の喉元に突き付けた匕首のようなもので、軍部の言うことをきかないと何も出来ない。昭和に入って、軍事が政治を左右する悪例を作ったのです。

代わった長州出身、陸軍大将の第三次桂太郎内閣も、「憲政擁護、閥族打破」の国民の大合唱の前に、わずか五十三日、内閣史上最短の記録であっけなく崩壊してしまいました。閥族というのは、師団増設要求をごり押しして西園寺内閣を倒した長州閥と陸軍のことです。しかも、内大臣兼侍従長として天皇の日常的な補佐役を務めていた桂が、宮中を出て首相になるのに、天皇から「お前、頼むぞ」と詔勅を出して貰いました。自分の都合のいいように天皇の詔勅を利用したんでは、立憲政治、憲法に基づいた立憲政治の土台が台無しになってしまう。「憲政を守れ」と、新聞と政党が先頭に立ったのです。こちらは、世論、民衆の力が内閣を倒した最初の例となりました。それまで、とかく政党の宣伝に利用されてき

た新聞が、逆に政党のシリを叩いて世論を呼び起こし、言論機関としての地位を確立した第一歩でもありした。また、政党が大きな力を持つようになり、政党政治の出発点になった点でも、画期的な出来事だったのです。

明治天皇の死が、明治の人々にとってどれほど衝撃的なことだったか。明治四十五年七月二十日、突然官報号外が発行され、天皇が尿毒症で重体であることが伝えられたのです。とたんに東京株式市場は大暴落し、警視庁は両国の川開きを中止させました。市電は電車の音が天皇の容体に障ってはいけないと、お堀端のレールにボロを布いて息をひそめるように徐行運転し、宮城前には平癒を祈る国民が続々と押し掛けました。宮内省は七月三十日、「午前零時四十三分に崩御された」と公式に発表しましたが、内務大臣原敬の日記によると、実際は前日の二十九日午後十時四十分だったようです。「原敬日記」は全巻八十二冊。十九歳の明治八年から六十五歳で暗殺される大正十年まで、明治・大正の政治史を知る上で大変貴重な資料ですが、原は「践祚の御式等挙行の時間なき為めならん」と書いています。そして大正新時代と共に、西園寺内閣と元老山県有朋との政治感覚の違い、対立が次第に表面化して来るようになるのです。

ご大喪は青山葬場で九月十三日に行なわれることになり、政府は経費を追加予算の形で支出するため、臨時議会を召集して承認を求めることにしました。ところが開院式の勅語案に、山県からクレームがついたのです。内閣側で用意したのは、「朕新ニ大統ヲ継キ祖宗ノ威霊ト臣民ノ忠良トニ倚リ先帝ノ遺業ヲ失墜セサラン事ヲ期ス」 ― こうなっていたんですが、「臣民ノ忠良トニ倚リ」が削られました。西園寺内閣が異例とも言える措置で、天皇の容体をその都度発表したのも「国民は天皇と共にある」。この思いからだったのですが、山県は、天皇が臣民の忠良に支えられているとのイメージを嫌ったのでしょう。原は「元老がかくの如き大事に国民の参加を好まないのだ」と書いていますが、時代は新しい変化、現状打破を求めて動きつつあったのです。

大阪朝日新聞の論説記者丸山幹治、政治学者丸山真男さんのお父さんですが、大正二年元日付の新聞に「吾人は何故となく新時代の気配を感ず」と書いています。明治の人たちは、近代国家を目指して「西欧文明に追い付き、追い越せ」と一生懸命でした。日清、日露の大戦争にも、歯を食い縛って頑張ってきました。それが明治の終わりと共に、そうしたがんじからめの束縛が解けて、精神的な自由を求める空気が出てきたのです。読売新聞の社説には、「大正国民の覚悟」と題してこうあります。「明治の文明は形式の文明だった。教育もそうだし、憲法も未だ形式の完備を成し遂げたに過ぎなかった」。そして「実質的に立憲国民たるの証左を示すのは、大正国民われわれの責任である」と訴えています。大正時代は、まさにそんな雰囲気で明け、「大正政変」もまた、そんな中で生まれていったのです。

日露戦争が終わった翌年、明治三十九年から「大正政変」までの七年間を「桂園時代」と言います。桂と西園寺の間で政権がキャッチ・ボールされたので、二人の名前をとってこう言うのですが、この「桂園時代」に常に重くのしかかったのが戦後財政の厳しさでした。日露戦争は、外国で日本公債を募集し、それで戦費を調達して戦った戦争です。外債の発行額は十二億八千万円にもなっていました。陸軍は戦争中の動員で臨時に四個師団増やしましたが、戦争が終わっても、今度はロシアの復讐戦に備えるのだといって、そのまま常設師団にしました。お金がありませんから、また公債を発行します。こうして公債額は十七億円を突破し、利子の支払いだけでも年間一億円を超すようになったのです。いま一億円と聞いてもちっとも驚きませんが、国家予算が五億円から六億円の頃の一億円ですから大変大きなものです。しかもロシアとの講和条約では、一文の賠償金も取れませんでした。戦争中の増税、非常特別税は、戦争が終わったらその翌年限りで廃止する約束でした。地租といって、土地の税金などを二倍に上げて一億二千五百万円の戦費を調達したのですが、これをなくしてしまえば、他にこれといって目ぼしい財源がありません。結局は廃止の約束もホゴにして恒久税とし、戦争中の重税がそのまま庶民の肩に重く残ることになったのです。

そこへ、陸海軍の軍備拡張競争が加わりました。明治四十年四月、第一次西園寺内閣の時に日本の国防方針が作られました。内閣は全く相談に預から、ず軍部だけで決めたものです。その上、仮想敵国もロシアとする陸軍と、アメリカとする海軍とに分裂してしまい、これが陸海軍の対立を激しくし、軍拡競争を煽る原因にもなりました。経済的にはまだまだ小国だった日本が、軍事大国路線を走り出したわけで、五、六億円の国家予算のうち三分の一が軍事費、三分の一が公債の償還や利子の支払いで消えてしまいます。国内の事業に回せるのは、残りたった三分の一なのです。

「硬直財政」―これが明治四十四年八月、第二次西園寺内閣がスタートした時の財政状況でした。打つ手は、思い切った行財政整理しかありません。ところが「健全財政」を看板にした西園寺内閣は、組閣の段階から難問にぶつかったのです。海軍大臣の斎藤実が留任に条件をつけてきたのです。それは前年の第二次桂内閣時代、一部しか認められなかった「海軍充実計画」の承認でした。認めなければ留任しないし、代わりの海軍大臣も送らないという、海軍挙げての要求です。この第二次西園寺内閣は、結果的には陸軍によって倒されたので、歴史の上では陸軍が悪名を残すことになりましたが、実は「軍部大臣現役武官制」の爆弾を最初に使おうとしたのは海軍だったのです。

海軍がこんな要求を出してきたのにも、それなりの理由はありました。国防方針で、陸軍は平時二十五個師団が必要だとして十九個師団まで増やしましたが、残り六個師団のうち二個師団の早期実現を期していました。海軍の方は、戦艦八

隻、巡洋戦艦八隻のいわゆる「八八艦隊」を目指していましたが、その海軍の計画を根底から引っ繰り返すような激震が襲ったのです。それは明治三十九年の暮れ、ロンドンから飛び込んできたロイター通信の電報でした。イギリス海軍が十二吋砲十門を搭載し、速力二十二ノット、時速四十キロで走る高速戦艦を建造し、「ドレッドノート」と命名したというのです。世界の造船所は一瞬息を止めたと言います。日本海海戦で活躍した戦艦三笠はおろか、最新鋭戦艦の積もりで造っていた薩摩、安芸、鞍馬も一夜にして旧式戦艦です。十二吋砲四門、速力十八ノットではとてもかないません。列強海軍は「ドレッドノート型戦艦を造れ」、その頭文字をとって「弩級戦艦を造れ」と、大艦巨砲時代に突入していったのです。

しかも弩級戦艦の河内、摂津の建造にかかったところへ、今度は一回り大きな大砲十三・五吋砲を積んだ超弩級戦艦ライオンの登場です。日本海軍も当然、計画の大幅な手直しを迫られました。第二次桂内閣の四十四年度予算案に、総額四億円を超す海軍拡張案を出してきたのです。陸軍の方も、韓国併合で朝鮮警備に必要だとして、二個師団増設を要求したのですが、桂首相は海軍にだけ八千万円の予算を認めました。この時建造を認められたのが、太平洋戦争でもおなじみの戦艦扶桑、巡洋戦艦金剛、比叡、榛名、霧島の五隻です。

陸軍の大御所山県有朋は、「国家の存立に関わる問題は、財政の難易で論じてはいけない」。桂にこんな親書を送って、二個師団増設の必要性を強調していたのですが、桂が御大の意向に逆らい、身内の陸軍の要求を蹴って、海軍に譲歩したのはなぜだったのでしょうか。まず、陸海軍両方一遍には認められない日本の財政事情がありました。となると、陸海軍のどっちを優先させるか、どっちに急ぐだけの理由があるか、ということになります。陸軍が盛んに口にしていたロシアの脅威は、四十年、四十三年と二回にわたって日露協約が結ばれ、外交関係はうまくいっていました。差し迫った脅威がないのです。これに対して海軍には、ある程度国民的な理解がありました。日本海海戦に大勝利して世界の一流海軍になった日本海軍です。「時代に取り残されないためには、弩級戦艦、超弩級戦艦は必要だ」と、国民の多くが思っていました。

そこへ、アメリカ海軍の一大デモンストレーションを見せ付けられたのです。戦艦十六隻で世界一周大航海をする — こんな派手な計画を思いついたのは、アメリカ大統領のセオドア・ルーズベルトです。これでアメリカ国民の海軍熱を煽り、世界一の大海軍を作ってアメリカの発言力を強めようというのですが、船体を白く塗ったので「ホワイト・フリート」と呼ばれた大艦隊が、東京湾に姿を見せたのは明治四十一年十月八日のことでした。ルーズベルトは日露講和会議を調停してくれた、日本にとっては大恩人ですが、「棍棒外交」と言われた積極外交論者です。「もの柔らかに話し、大きな棍棒を持って行け。そうすれば遠くまで行ける。このアフリカの格言を私はいつも大切にしている」。これはルーズベルトの

言葉です。満州や移民問題をめぐって日米摩擦が起きている時でしたから、明らかにルーズベルトの「棍棒外交」でしたが、日本は朝野をあげてアメリカ艦隊を歓迎したのです。東京、横浜の至る所に日米両国旗が飾られ、歓迎のイルミネーションが輝きました。新橋の駅頭では、上陸してきたアメリカ海軍将兵を千四百人の小学生がアメリカ国歌を歌って迎えました。ルーズベルトは「私の世界平和に対する最大の貢献は、世界一周大航海だった」。こう自画自賛していますが、日本国民の間にも「アメリカに負けない大海軍を」といった国民感情が生まれていったのです。世論の風向きは、陸軍には冷たく、海軍には暖かだったのです。

ところが桂首相が、八千万円の海軍拡張予算を認めたことが、政権を再び政友会総裁の西園寺に譲る原因になります。桂は四十四年度予算の編成に当たって、一般会計では公債を財源とした予算は立てない、五千万円以上の公債償還計画を堅持する。こういう方針を立てていたのですが、乏しい懐の中のやり繰りです。海軍に予算をつければ、議会第一党である政友会の要求している事業、鉄道とか通信網の整備といった予算を削らなくてはなりません。しかも四十四年度予算案は、二百四議席と衆議院の過半数を制している政友会の協力がないと、議会を通らないのです。桂は第二次内閣を組織した時、「一視同仁」、どの政党も公平に見て、政友会だからといって特別扱いはしない。こう強気の姿勢を見せていたのですが、この海軍予算で政友会に頭を下げなければならなくなりました。桂は四十四年一月、政友会代議士全員を築地の精養軒に招待すると、「情意投合し協同一致して憲政の美果を収めたい」。うまい言葉を使うものですが、お互いの気持ちがぴったり一致したといって、政友会に協力して貰う。その見返りに、機会を見ての政権交代を約束し、八月の第二次西園寺内閣となったのです。

この「桂園時代」の立役者は、何といっても政友会の実力者原敬です。日露戦争が終わった後、第一次西園寺内閣が出来たのも原の剛腕によるものでした。当時の桂首相には、ロシアとの講和条件はかなり厳しいものになりそうだ、領土や賠償金は簡単には取れそうもない、との認識がありました。たとえ講和交渉を纏めても、議会を通すにはどうしても政友会の協力が必要でした。そこで原に協力を求めたのですが、原は「それなら政友会総裁の西園寺に政権を譲るか」と、講和後の政権譲渡を強く迫ったのです。

大正七年に首相になった原は、陸海軍大臣と外務大臣以外は全て政友会党員という、日本では初の純政党内閣を作りました。爵位を持たない者が初めて首相になったというので、「平民宰相」と世論の支持を受けましたが、幕府時代の家柄はお公家さんの西園寺を除けば、歴代首相の中では原が一番高いのです。原は岩手県盛岡の南部藩家老の家に生まれましたが、南部藩は戊辰戦争で仙台藩などと奥羽列藩同盟を結んで官軍に対抗しましたから、維新後の生活は大変でした。明治四年、十五歳の時、二十余室もあった屋敷のうち母屋だけ残して売り払い、上京

したんですが、その金も半年でなくなりました。資産家に嫁いでいた叔母さんが援助を申し出ましたが、原は断っています。叔母さんには原と同年配の従兄弟がいて、一生頭が上がらなくなるのがイヤだったのです。その頃の原は、単衣を三枚重ね着して東京の寒空に震えていたといいますから、まさに原の反骨精神でした。藩の作った英学塾を退学すると、麹町一番町のカトリックの神学校に入りました。食費は一切教会から支給され、食べるのに困らなかったからですが、洗礼名「ダビデ」というクリスチャンになっています。そして明治七年、フランス語を教えて貰うという条件で新潟のフランス人宣教師の学僕になり、ここで覚えたフランス語が原に外交官の道を開くことになります。

明治の賊軍の子弟は、みんなお金のかからない官費の学校、食費から小遣いまで出る陸軍士官学校や海軍兵学校に入って、世の中へ出て行きました。原も海軍兵学校を受けましたが、落ちてしまいます。原が海軍士官になっていたらどうだったかと、つい想像したくなりますが、明治九年にやはり官費の学校、司法省の法学校に入りました。現在の東大法学部の前身ですが、予科三年の時、粗末な食事に文句をつけた学生が退学させられる事件があり、原は抗議して薩摩出身の校長の排斥運動を起こしたのです。「賄征伐事件」と言われるものですが、原は退学処分を受け、そのコースは新聞記者へと曲がってしまいました。

実は、原の生涯にわたって何かと面倒を見たのは、ちょっと意外に思われるかも知れませんが、長州出身の元老井上馨なのです。井上は財界の大御所として権勢を振るい、お金に関してはとかく評判がありましたが、「天性才を愛し、惚れ込んではよく人を用いた」と言われた人です。井上が大蔵卿時代、「大蔵省は腕利きを集めた」と評判だったそうです。明治十五年、大東日報の記者をしていた二十六歳の原を外務省御用掛にスカウトしたのは、外務卿の井上でした。原は二十二年、パリの公使館書記官から農商務省参事官になりますが、大臣をしていた井上のはからいです。そして原が浪人するたびに、大阪毎日新聞の社長や北浜銀行の頭取に推薦してくれたのも井上だったのです。

原は明治・大正の政治家には珍しく、髭を生やしていません。二十八歳で天津領事になった時、独身では具合が悪かろうと結婚したのですが、十三歳年下の最初の奥さんは美人ではあったが、相当な悪妻だったようです。大臣のお供をして華族女学校を見学した際、十五歳の女生徒を見初めたんですが、ヒステリーで、とにかく髭が大嫌い。それで原は、髭のない政治家になったんだそうです。これは、毎日新聞の記者をして戦後ＮＨＫの会長をした阿部真之助が書いているのですが、「手のつけようのない我儘者だった。役所から帰ると、奥さんをなだめるため赤ん坊のようにおんぶして、庭をうろうろしている原がよく見られた」。阿部は「私たちが原の所へ理論を持ち込んでは、いつも容赦なく叩き伏せられたのは、彼の現実主義の無理屈によるものだった。ところがヒステリーは、現実主義

以上に無理屈だった。最上級の無理屈には、原といえども降参せざるを得ない」

――こんなことを書いていますが、ヒステリーを最上級の無理屈と言うあたり、やはり恐妻家としても有名だった阿部の偽らざる心境だったのかも知れません。それにしても奥さんをおんぶしている原の姿は、後年の隙のない原に重ね合わせると、「原にもそんなことがあったのか」とびっくりさせられます。

その原が終生にわたって尊敬していたのが、明治外交の第一人者陸奥宗光でした。陸奥の大臣秘書官をして認められたのですが、原は何か難しい問題にぶつかるたびに、「陸奥ならどうしたろうか」と考えて行動したといいます。面白いのは、陸奥にしろ原にしろ、薩長閥を憎み、その打倒を悲願とした人はいなかったのに、必要とあればいつでも藩閥と妥協していることです。原が井上に重用された秘密は、こんな所にあったのかも知れません。

原の俳句の号は、「ひと山」と書いた「一山」です。戊辰戦争に敗れた東北は、薩長から「白河以北一山百文」、福島県の白河から北は一山いくらで安く買える見切り品だ、とバカにされました。原は、この屈辱を忘れないで、いつかは見返してやる。その怒りを「一山」という号にこめたのです。仙台に河北新報という新聞社がありますが、この社名もやはり白河以北の屈辱からつけられたものです。

原は、藩閥打倒の道を政友会に選びました。といっても、藩閥に公然と対立するのではなく、時には妥協し、時には手を組む。そうやって一歩一歩、政党内閣への道を開いて行く。原に一貫している政治姿勢は、この現実主義でした。ですから「情意投合」による桂内閣との提携も、「憲政の一進歩を促すもの」と評価しています。藩閥、官僚勢力について、日記に「今日俄に之を打破一掃するが如き事は行はるべきものに非らざる」として、当時の政治状況の中での選択だと考えているのです。政友会を極力与党の地位に置いて、国家予算を有利に利用する。原は鉄道を敷き、道路や学校を作って、その地方に政友会の地盤を築いていったのです。「我田引水」をもじって、「我田引鉄」という言葉が生まれたほどでした。

第二次西園寺内閣で内務大臣、副総理格になった原は、当然軍拡よりは内政優先です。斎藤海軍大臣が留任の条件として出してきた海軍充実計画は、原にとっては論外でしたが、西園寺首相は理解を示しました。確かに、断れば海軍が大臣を出して来ない。内閣を作れない心配がありましたが、西園寺には海軍の要求を入れることで、そのバックにいる海軍切っての実力者、薩摩閥の山本権兵衛を味方にしたい。この思いが強かったようです。西園寺は第一次内閣時代、長州の山県、桂の干渉により何度も苦い目にあっています。あげくは、社会主義の取り締まりが手緩いということで、総辞職に追い込まれました。西園寺は、薩摩閥の力で長州閥に対抗しようとしたのです。

緊縮財政の中で、陸軍と海軍、それに政友会が三つ巴となって、無理を承知で「予算を寄越せ」と言ってきます。この難問を、それこそ魔法使いの手品みたいに

解決したのは、三年後の第一次世界大戦でした。ヨーロッパの戦場から遥かに遠い日本は、空前の軍需景気に沸いたのです。とにかく古い鉄砲でも何でも、鉄とさえ名前がつけば飛ぶように売れたといいます。あれほどあった借金をあっという間に返しただけではなく、債務国がお金を貸す側、債権国になったのですが、それは三年後の話であって、「桂園時代」はとにかくお金が問題でした。

大蔵大臣の山本達雄は、四十五年度予算の編成で、債は一切発行しない、新規事業も凍結という、厳しい緊縮方針を打ち出したのです。この方針からすれば、海軍の軍拡は新規事業の最たるものですが、西園寺の組閣の際の約束もあって、海軍だけは凍結から外されました。さすがに三億五千万円の海軍拡張案は拒否しましたが、戦艦三隻分、九千万円を五年継続事業として認めたのです。何の条件もつけなかった陸軍は、二個師団増設要求が「行政整理の結果を見て」と、またも一年先送りです。陸軍には大きな不満が残りました。陸海軍の対立は、どっちが主でどっちが従かの主導権争いでしたが、海軍が予算で優位に立てば「海主陸従」になってしまう。陸軍にはそんな危機感が出てきたのです。

こうして明治の最後の年である四十五年を迎えたのですが、四月に陸軍大臣の石本新六が急死しました。余談ですが、この石本の長男の最初の結婚相手が、百歳を超えて七年前まで元気に活躍されていた加藤シズエさんです。それはともかくとして、後任の陸軍大臣は、長州全盛の陸軍で意外にも薩摩の支藩都城出身の上原勇作中将でした。上原は若い頃フランスに留学し、読書家、ヨーロッパ通として知られていました。旭川、宇都宮と田舎の師団長回りをさせられ、陸軍の不平分子、反長州派の頭領と目されていましたから、西園寺首相は薩摩から出た十五年ぶりの陸軍大臣に期待感を持ちました。原も日記に「異分子の如き上原を挙げなば或は陸軍の改革もなさんか」――こう書いて、無理な要求はしてこないだろうと見ていたのです。

ところが陸軍の上原起用は、この押しの強い古参の中将で、二年も見送られている師団増設を何が何でも実現しようという、陸軍の決戦体制でした。上原の操縦役は長州閥のホープ、後に陸軍大臣から首相になる軍務局長の田中義一少将ですが、山県から陸相就任を求められた上原は、「濫りに陸軍縮小を叫ぶ政党連中の矢面に立つ」と、増師に積極的に取り組む決意を誓っているのです。上原が二個師団増設要求を西園寺内閣に提示したのは、元号が大正と改まったばかりの八月九日でした。朝鮮には交代で一個師団半を派遣しているが、経費もかかるし訓練も行き届かない。ロシアに備えるためにも、二個師団増設して朝鮮に常駐させたい、と言うのです。経費は六年計画、三千三百万円余り。朝鮮の交代費用二百六十万円がかからなくなるし、陸軍部内の行政整理で捻出した二百七十万円もこれに充てる。軍服の耐用年数を延ばしたり、兵器の費用も節約するから、とにかく大正二年度から認めてほしいというものでした。

しかし西園寺首相には、認める気ははありません。政友会は五月の総選挙で圧倒的な勝利を収めたばかりでした。衆議院三百八十一議席のうち二百九議席と過半数を制したのは、国民が西園寺内閣の公約、緊縮財政と行政整理を支持したからだ ― この自信があったのです。西園寺は山県を訪ね、「行政整理が軌道に乗り出している時、師団増設案を出されるのは迷惑至極」と、陸軍の要求を撤回するよう求めました。閣内でも反対論が続出しました。西園寺首相が陣頭に立って大幅な経費節減を実行している最中です。各省とも予算の八％から十五％も節減しているのに、陸軍は八千万円の大予算でたったの三・三％です。それも一般会計に戻さないで陸軍拡張に充てるのでは、全く財政再建に全く役に立ちません。山本蔵相が「ない袖は振れない」と言えば、上原陸相は「こと国防に関する以上、ない袖も振るべきだ」と言い張ります。このやり取りが新聞に出て、「ない袖は振れない」は流行語になったそうです。

新聞も一斉に陸軍批判を展開しました。大阪朝日が「陸軍当局の要求如何に強大なりと雖も、国民が政府に対する公約履行の要求は、更に強大なる事を忘るべからす」と書けば、「軍備は消防の如し」と論評したのは時事新報です。「消防隊が火事を消してくれれば、近隣の居住者はみんな涙を流して感謝するだろう。ところが、その消防隊が、お前たちの生命、財産が助かったのは消防のお陰だと言って財産を提供せよと強請したらどうなるか。今日の陸軍の態度は、まさにこの消防隊に類するものだ」と、陸軍非難の論調が強くなっていったのです。

陸軍首脳の「内閣を倒しても要求を通す」― この決意は、十月に入って固まったようです。大正二年度予算の編成作業を控えて、事態対処案を作成しているのですが、まず明治三十九年以来の経過を説明して、海軍に比べて陸軍の扱いが不公平だと訴える。それでも閣議で反対された場合には、陸軍大臣の辞職で総辞職に追い込むというシナリオです。田中軍務局長は、長州出身の朝鮮総督寺内正毅大将に「国家由々しき大事の時、ご決心切に願い上げ候」と電報を打っています。自分たちが西園寺内閣を倒すから、その後の組閣を引き受けろというのです。一方、西園寺首相も、世論の支持を確信し、陸軍と全面対決の決意を固めました。十一月十日、山県を訪ねて「師団増設案は切る積もりである」と最後通告したのです。大正二年度予算案には海軍拡張費一千万円が計上されることになっていて、山県は「その一部を陸軍に回したらどうか」と妥協案を出しましたが、西園寺が拒否し、物別れに終わりました。

十一月に入ると、政友会各支部の「増師反対決議」が相次ぎました。政友会の運動がこんなに下から盛り上がったのは、初めてのことだと言われましたが、東京商業会議所が「増師反対声明」を出すと、全国各地の商業会議所もこれにならいました。民衆の政治意識が飛躍的に高まっていたのです。明治二十三年に第一回総選挙が行なわれた時には、有権者といっても直接国税十五円以上を納めた者です

から、当時の人口四千万人の一％余り、四十五万人に過ぎません。ほとんどが地主など富裕階級で、投票する時には誇らしげに住所氏名を書き、実印を捺したものなんだそうです。それが三十二年に十円以上に下げられ、しかも日露戦争で戦時増税で十円以上の納税者がぐんと増えてしまいました。四十一年の総選挙では有権者百五十八万人、三倍以上と、選挙法を改正したのと同じくらいの変化があったわけです。

「陸軍大臣の首を百人替えても、要求をはねつけよ」。こんな激しいマスコミ論調も出てきて、山県には頭の痛い事態でした。「陸軍の要求は通したいが、内閣を倒してまで悪者にはなりたくない」。これが山県の本心だったようです。山県という人は実に鋭いと思うのですが、一路倒閣に走る上原陸相にこんな手紙を出して、自重を促しているのです。「たとえ内閣を倒しても、事はそのまま落着しない。必ず陸軍対国民、藩閥対国民、官僚対国民の形で再燃してくるだろう」。「大正政変」はまさに山県の心配通りになっていくわけですが、その山県が最後に考えた秘策が天皇の詔勅でした。陸軍大臣が辞表を出し、天皇から西園寺首相に「陸軍とよく協議するよう」詔勅を出して貰う。つまり山県は、西園寺内閣は存続させ、天皇の威光で西園寺の譲歩を引き出そうとしたのです。

西園寺首相は十一月三十日、上原が態度を変えないことを確認した上で臨時閣議を招集しました。そして、陸軍の師団増設要求は拒否する、明日陸相に勧告して辞表を出させる、陸軍が後任を出さない時は内閣総辞職をする ― この三点を閣議決定したのです。十二月一日、辞表提出を求められた上原は、「辞表は後で届ける」と言って官邸を出ましたが、翌日青山離宮に参内して天皇に直接辞表を出したのです。「帷幄上奏権」、帷幄とは幕を張り巡らした総大将のいる所、つまり天皇のことですが、統帥機関の長である参謀総長、海軍の軍令部長は、軍機・軍令事項について天皇に直接上奏することが出来ました。陸軍大臣にもこの権限があるという拡大解釈なのですが、大臣の辞表は首相に提出するのが決まりであり、しかも大臣の辞職は軍機・軍令事項ではありませんから、全くの違法です。

大正天皇は「上原がこんなものを持ってきたよ」と、その辞表を内大臣の桂に渡されたそうです。ここまでは山県の筋書き通りでした。この後、桂が天皇にこうなった経過を説明する。そして山県が予め用意して、桂に渡してあった詔勅が出るはずだったのです。ところが、ここから山県の計画は狂いました。肝心要の桂が、山県の指示通りには動かなかったのです。桂はそのまま上原の辞表を西園寺に返してしまい、詔勅は出ませんでした。西園寺は山県を訪ねて、陸相後任について尋ねた経過を三日の閣議で報告しています。「原敬日記」によると、山県は「直ちに引き受ける者はなかろう。後任者云々と言うよりも、何か時局を処理されてはどうかと、体よく断った」というのです。西園寺内閣は既定方針に従い十二月五日に総辞職、こうして「大正政変」の幕が切って落とされたのです。

それにしても桂は、なぜ長州閥の御大である山県の意向に逆らったのでしょうか。それは、桂の政権欲以外の何ものでもなかったのですが、十分ほど休憩して話してみたいと思います。

×　　×

「月が出た出た」の炭坑節は、戦争中の石炭増産のため筑豊炭田で歌われた炭坑唄ですが、もともとはこの「大正政変」の時に流行った演歌なのです。演歌というと、今では日本的な情感をこめた歌を言いますが、明治・大正の頃は文字通り演説代わりの歌でした。自由民権を求めて壮士たちが街頭で歌い、民衆もまたそれを聞いては、政治、社会に対する不満を思いっきり吐き出したのです。人気演歌師の添田唖蝉坊、この人は「あゝノンキだね」の「ノンキ節」で一世を風靡した演歌師ですが、バイオリンで面白い節づけをしながら、「月が出た出た」と痛烈に批判したのが桂太郎でした。炭坑節の月は三池炭鉱の上に出ましたが、唖蝉坊は位人臣を極めた桂を月にたとえ、東京には煙突が多いから、さぞ煙たかろうと皮肉ったのです。そして、この歌が全国に広がると共に、政党、新聞といったたくさんの煙突から、猛烈な「桂批判」の煙が噴き出していったのです。

長州出身の桂は、総理大臣に三度もなっていますし、陸軍大将、公爵。爵位では最高の「おおやけ公爵」です。陸軍大臣、台湾総督を歴任し、この直前には内大臣兼侍従長、元老にもなっています。まさに位人臣を極めました。長州閥にも恵まれましたし、人の操縦術にも巧みな人でした。誰彼構わずニコニコ、ポンと肩を叩くので、「ニコポン宰相」とか「軍服を着た太鼓持ち」とか言われました。日露戦争中に新橋の名妓お鯉を身請けしたもんですから、新聞の批判も厳しく、東京朝日新聞は「新人名字典」でこんな記事を載せています。「内閣総理大臣なり。大臣の上に冠るが故にカツラというなり。元はサムライなりしも、シャクを貰ってからは公卿様となれり。長州の山県系の駿足にして、天下の料理よりもお鯉の料理が巧いという事なり」。

人をそらさないことでは定評のあった元老の伊藤博文が、「俺が八方美人なら桂は十六方美人だ」と言ったそうですが、ただ要領と調子の良さだけでその地位を掴んだ、ラッキー・ボーイだったのでしょうか。桂が明治三十四年に第一次内閣を組織した時、「緞帳内閣」と言われたものでした。舞台の緞帳の後ろには、うるさい元老が何人も控えています。その言うことをきかないと、何も出来ない二流内閣だ。これが定評でした。ところが日露戦争という、明治国家最大の危機を乗り切っただけではなく、四年七か月と戦前の内閣では一番の長期政権になりました。私は、桂はやはり大変な政治手腕の持ち主だったと思うのです。

桂は明治三年、二十三歳の時にドイツへ留学しましたが、最初はフランスへ行く予定でした。明治の陸軍が最初は幕府にならってフランス式を採用し、桂も横浜でフランス語を少し習っていたからです。ところがアメリカ経由でロンドンに

着くと、普仏戦争の真っ最中。フランスは連戦連敗で、パリはプロシア軍によって包囲されています。そこで勝っているプロシア、ベルリンに留学先を変えたのですが、これが陸軍での出世街道を約束しました。旅の途中で全く喋れないドイツへ行き先を変えた当たり、桂の感覚の良さ、決断の早さでしょう。明治六年に帰国すると、陸軍卿山県有朋に軍政改革の意見書を出し、翌年陸軍大尉に抜擢されました。山県は目を細めるようにして、可愛がったといいます。八年にはドイツ公使館付武官となり、ドイツ語ペラペラの桂は、陸軍をフランス式からドイツ式に切り替える、その先導役を務めたのです。

桂はまた、大変な自信家でした。第一次内閣でうるさい元老たちにいろいろ気を遣い、自前の政治をするには政治改革の必要を感じていたのでしょう。第二次内閣では山県の意向を無視し、独自の政策を進める場面が目立ってきたのです。大体が、桂と西園寺の「桂園時代」からして、桂の元老排除の第一歩でした。明治の元老が大きな力を持ったのは、「キャビネット・メーカー」、内閣の製造者だったからです。ところが桂は、原敬とじか取引して西園寺に政権を譲ってしまいました。山県たち元老には、段取りを決めた後で事後承諾を求めただけだったのです。明治四十五年七月に外遊していますが、明治天皇に「元老たちもだんだん年をとってきます。これからは国民みんなで陛下をお助けしなければならない」。こう言って外遊の許可を得た背景には、桂自身も元老になりながら、これからの政治は従来の元老を排して、新しい政治をしなければダメだ。それには、与党になる政党を持つことだ。新党構想を抱いて、イギリスの議会政治を見てこようとしたのです。

ところが旅の途中で明治天皇が亡くなり、桂の計画は狂いました。急遽帰国した桂を待っていたのは、内大臣兼侍従長というポストだったのです。浜松までわざわざ出迎えた朝鮮総督の寺内正毅が、山県のこの意向を伝えると、桂は東京までの車中、ずっと浮かない顔だったといいます。政治に満々たる抱負を持っていたのに、政治には手の届かない雲の上、宮中に祭り上げられてしまったのです。しかし、世間の受け止め方は違いました。新聞は「長州閥が新らしい天皇になったのを機会に、宮中も握ろうとしたのだ」と批判しましたし、原敬も日記に「山県一派の陰謀にて枢府並に宮中を一切彼等の手に収めんとの企に出たること明かなり」と書いています。ところが、桂と親しかった国民新聞の徳富蘇峰は、だんだん力をつけてきた桂の政治的野心が、山県の嫉み、元老たちの反発を買い、桂を宮中に閉じ込めることになった、というのです。

桂は明治四十四年、韓国併合の功績で公爵になっています。総理大臣の桂が自分を公爵にしたのですから、お手盛り以外の何ものでもないのですが、蘇峰は「御身の公爵は寔に高価である」、高いものにつくぞ、命取りになるぞ、と警告しています。長州の大先輩井上馨も、薩摩の元老松方正義も、一格下の「そうろう侯

爵」なのです。面白いはずがありません。山県にしても、桂に対して自分が親分だと思っていたのに、形の上では桂と同輩になってしまいました。ですから山県とすれば、桂を宮中に閉じ込め、しかも宮中に長州閥の勢力を張ることが出来れば、一石二鳥だったわけです。

その桂に、四か月も経たないうちに政権復帰のチャンスがやって来たのです。上原陸軍大臣の辞職です。桂が山県の指示に従って詔勅を出せば、西園寺は勅命に従うしかありません。西園寺が陸軍に譲れば西園寺内閣は続き、桂の目がなくなってしまいます。桂が山県に背いて詔勅の段取りをしなかった狙いは、ここにありました。桂は、西園寺内閣が倒れれば政権は必ず自分の所に回ってくる。そう読んでいたのです。

西園寺内閣総辞職を受けて大正元年十二月六日、元老会議が宮中に召集されました。元老会議が開かれるのは明治三十四年の第一次桂内閣以来十一年ぶりのことでしたが、後継首相の選考は難航しました。まず西園寺に留任勧告をしたのですが、西園寺は「陸軍の譲歩がない限り、留任は不可能だ」と明言します。続いて候補に上がった松方正義も、海軍の山本権兵衛、陸軍の寺内正毅も、次々と消えていきました。乏しい財政の中では、陸海軍同時の軍拡は不可能です。陸軍が師団増設要求を引っ込めるか、海軍が軍艦費用の一部を陸軍に回すか。どちらかが譲らない限り、新内閣は作れないのです。陸軍の望む内閣は海軍の望まない内閣であり、海軍の望む内閣は陸軍の望まない内閣でした。桂は、元老たちが頭を下げて頼みに来るのを、じっくり待ちました。十四日の第九回会議で、万策尽きた山県が、「自分か桂が出て事態を収拾するしかない」と言い出し、元老会議は山県の七十四歳という高齢を考慮して、六十五歳の桂を推挙したのです。桂の思惑通りでした。

桂は十七日、組閣の大命を受けると、その足で椿山荘に山県を訪ねています。「政治問題に関しては、不肖私が職を奉ずる以上、今後決して貴方のご指示を煩わさぬ積もりです。どうかここでご静養下さい」 ― 「年寄は休んでおれ」とまず山県の口を封じ、うるさい元老たちを骨抜きにしました。しかし「才子才に溺れる」と言います。雲の上からの復活に、さらに体裁を整えようとしたのです。つべこべ言わせないため、この日「更ニ卿ヲシテ輔国ノ重任ニ就カシメン事ヲ惟フ」 ― こういう詔勅を出して貰ったのですが、この天皇の威光を笠にきたやり方が桂の命取りになりました。「宮中・府中の混同」、宮中に入った者が政治に介入する。しかもお手盛りで詔勅を出して貰う。これでは立憲政治の土台が台無しになってしまう。「憲法を守れと、護憲運動を起こした精神はここにあった」と、尾崎行雄は言っています。政党、新聞の十字砲火が、攻撃目標を桂太郎一点に絞って集中することになったのです。

大正デモクラシーの出発点になった第一次護憲運動は、「交詢社のストーブ談

議から始まった」と言われます。交詢社というのは、慶応義塾、時事新報を創設した福沢諭吉が明治十三年、慶応卒業生のために作った社交クラブですが、西園寺内閣総辞職から一週間後、十二月十二日のことだったといいます。福沢桃介、この人は福沢諭吉の養子で、この千葉県から政友会公認で代議士に当選したばかりでしたが、六、七人でストーブを囲んでわいわいやっているうちに、「けしからん、これが黙っていられるか」となりました。その席には新聞記者もいて、「世論を喚起するのは君たち新聞だ。大いに歩調を揃えて戦おう」となったのです。

さっそく十三日には、東京市内の新聞・雑誌記者、弁護士ら二十人余りによる「憲政作振会」が組織され、次の決議をしました。一、国政に対する元老の干渉を絶対に排除す。二、政友国民両党の堅実なる分子を基礎とし、純民党の成立を期す。三、刻下の財政状態に伴はざる師団の増設に反対す。そして翌日の十四日には、新聞・通信関係者有志の呼び掛けで時局問題懇親会が築地の精養軒で開かれました。集まったのは慶応出身の政友会の尾崎行雄、国民党の犬養毅、三井財閥の実力者朝吹英二ら二十八人です。福沢が「明治維新は尊皇攘夷のお題目で全国の志士の血を沸かせた。今度もそういうスローガンがいる」と提案し、「憲政擁護」と「排閥興民」、閥を排して民を興すの二案が出ました。衆議一決、「憲政擁護」で行こうとなった時、「待った」をかけたのが国民党の古島一雄です。戦後の首相吉田茂のご指南番としてご記憶の方も多いと思いますが、新聞日本の政治記者として活躍し、犬養毅に惚れ込んでその懐刀となった人です。古島は「四文字では語気が弱い」と言うのです。「これを憲政擁護・閥族打破と八文字にすれば、強く響く」。こうして決まった「憲政擁護・閥族打破」の声が全国にこだまし、民衆を巻き込んでいったのです。

雨の降りしきる十九日、「憲政擁護国民大会」が木挽町の歌舞伎座で開かれました。午後一時開会だというのに、三時間も前から聴衆が詰め掛けました。入場料三十銭。当時の日雇いの日当が十九銭だったといいますから、寿司折に二合壜のお酒かついたにしてもかなりの値段でしたが、場内は三千五百人で超満員。場外は溢れた数百名が「入れろ、入れろ」の騒ぎです。紳士もいれば学生もいましたし、法被姿の車夫や露天商もいました。

まず「閥族の横暴跋扈、今や其極に達し、憲政の危機、目睫の危機に迫る。吾人は断固妥協を排して閥族政治を根絶し、以て憲政を擁護せんことを期す。右、議決す」。宣言書が満場の拍手で可決されると、尾崎が演壇に立ちました。「諸君、国民は彼らに対して一大決戦なさざるべからず。しかし、我々の戦闘準備は弾丸ではない、鉄拳でもない、道理と正義の利剣である。正義の向かうところ、天下に敵なし。この利剣を振るって、大いに閥族を殲滅しようではないか」。ほとばしるような口調で熱弁を振るえば、犬養は前かがみに顎の山羊髭をしゃくって、「彼らが今日まで寿命を続けたのは、畢竟これを破る者がなかったためであ

る。政党ありたりといえども、いわば形だけがあって藩閥打倒の精神なく、わずかに蝸牛角上の争いに終始して個々分立しておったがため、藩閥がかくも力を得たのである。これ畢竟するところ、我々政党が意気地がなかったためである。今日以後、妥協は一切これを封じるのであります」。一杯機嫌も手伝って割れんばかりの大歓声です。明治から大正に代わって「大正維新、大正新政」といった、漠然とした変革への期待がありました。減税要求もあったし、一握りの元老支配に対する不満もたまっていました。「陸軍横暴、長州横暴」の怒りもありました。そうした雑多な声が、組閣の大命が下ったばかりの「桂内閣打倒」の一点でまとまってしまったのです。

それまで、議会第一党の政友会と第二党の国民党は犬猿の仲でした。ですから尾崎も、最初は半信半疑だったそうです。「いつも知らない所で妥協が成立してバカを見る。自分は臆病だから、今度も人の後からついて行く積もりだった。ところが政友会も国民党も一緒になって、真剣に議論している。これは本物だと思って、勇気を出して突進する気になった」。尾崎はこう話していますが、それにしても凄いエネルギーです。私の父は一介のサラリーマンでしたが、絵が好きで日曜日というと妙義山とか上野の不忍池に油絵を描きに出掛けました。小学生の私は絵の具の道具箱を持ってお供をさせられるのですが、上野へ行くともう絵の方はそっちのけで、街頭演説に夢中になってしまうのです。「ヒヤヒヤ」などと大声で合いの手を入れるものですから、随分恥ずかしい思いをしたものですが、今考えてみますと、あれが大正デモクラシーの気分だったのかも知れません。

桂自身は新しい政治を目指しながら、結局は、困った時は「天皇の威光」という従来の政治の枠組から抜け出せませんでした。財政が厳しいことはよく承知していましたから、組閣に当たって陸軍の増師団だけではなく海軍の補充計画も一年延期する — いわば「陸海軍相打ち」にしようとしたのですが、海軍が態度を硬化させ斎藤海相は留任を拒否しました。そこでまた、斎藤留任に詔勅を使ったのです。こうして十二月二十一日に組閣を終えた桂は、最大の難問である陸海軍の軍拡競争を「一年凍結」で解決し、政局運営に満々たる自信を持っていました。

議会はすぐ年末年始の休暇に入りましたが、相次ぐ詔勅作戦が「桂内閣打倒」の火に油を注ぐことになったのです。政友会と国民党が政府反対で提携すれば、衆議院で圧倒的多数を占めることになり、議会を乗り切ることはとても不可能です。しかも、大阪毎日新聞社長の本山彦一が逓信大臣になった後藤新平に手紙を送って、「有識者や志のある者は勿論、男女の学生、商人、農民から馬丁や車夫に至るまで、お風呂屋、髪結い床で政治向きの話で持ちきりだ。元老会議の不始末に対しては、裏店井戸端会議に上り、炊事婦や小間使いまでが政府批判をしているほどで、近来珍しき政治思想の普及変化を実現し、万一新聞が唆すような態度に出たら、日比谷焼き打ち事件の再燃になるかも知れない」。こう警告したよ

うに、「政治の季節」が訪れつつあったのです。

年が明けて大正二年に入ると、護憲運動は政党の枠を越えて、まさしく国民運動としての広がりを示すようになりました。新聞は連日のように各地、各団体の時局講演会を報道し、「記者大会開くべし、大演説会開くべし」と書き立てます。ところが一月二十一日に再開された国会は、またしても詔勅で二月四日まで十五日間の停会です。停会というのは、今の憲法にはない制度ですが、明治憲法下では天皇の命により衆議院、貴族院の機能を一時的に停止することが出来ました。桂は前日の二十日、新聞記者を招いて念願の新党の計画を発表し、この停会中に政界再編成の波を起こそうとしていたのです。万年野党の国民党に新党のクサビを打ち込めば、脱党者が続出するだろうし、政友会からもかなりの参加者がいるだろう。こういう読みでしたが、二月七日「立憲同志会」と命名された新党に集まったのは、国民党の脱党者四十六名、政友会からは一人もなく、もともと桂寄りの中央倶楽部三十四名、無所属議員六名と、期待はずれに終わったのです。

この間、一月二十四日には新富座で第二回国民大会が開かれ、入りきれない群衆が二万人も路上にひしめきました。あっちこっちで街頭演説が始まり、市電は線路を塞がれストップです。尾崎や犬養の演説に、「よう、憲政の神様！」の声がかかったのは、この時なんだそうです。そして、この護憲運動の波は、全国各地に大きなうねりとなっていったのです。まず関西に飛び火して、二月一日には風雪の舞う大阪・中ノ島公会堂前で、三万人が「政友会頑張れ」の大合唱です。

停会明けの二月五日、新聞各紙は「天下分け目の決戦」、「政府対政友会の決戦」の大見出しを掲げました。政友会は、この朝の代議士会に病気療養中の一人を除いて全員が出席し、結束の固さを見せましたが、国民党の方はさらに脱落者が増え出席は四十五名です。しかし、半分に引き裂かれてかえって犬養の下に結束し、政友会と攻守同盟を結んだのです。政友会の実力者原敬も、桂内閣と決戦の覚悟を決めました。不信任決議案の提出です。賛成署名者二百三十四名。三百八十一議席の六割ですから、桂に残された道は解散しかなくなったわけです。

衆議院の門という門は、早朝から数千の群衆に囲まれました。桂新党の議員がやって来ると、「通すな」、「殴ってしまえ」の怒号です。超満員の傍聴人が見守る中、桂首相の施政方針演説に続いて内閣不信任決議案が上程されました。提案理由の説明に登壇したのが、紋付羽織袴の尾崎です。激しいヤジの中、尾崎は最初から喧嘩腰だったそうです。原稿も見ないで二十分間、「お聴きなさい、お聴きなさい」と、桂が自らの進退、組閣に際して二度も詔勅をわずらわし、天皇の権威を借りて全てを正当化しようとした責任を、それこそ手を振り足を踏みならして追及したのです。「彼等は常に口を開けば忠愛を唱へ、恰も忠君愛国は自分の一手専売のごとく唱へてありまするが、其為すところを見れば、常に玉座の蔭に隠れて、政敵を狙撃するが如き行動を執って居るのである。彼等は玉座を以て胸

壁となし、詔勅を以て弾丸に代へて政敵を倒さんとするものではないか」。「大正政変」を象徴する名文句として、後々まで語り継がれる尾崎の弾劾演説です。

尾崎も最初は、言葉は出来るだけ穏やかなものにし、理詰めにする。真綿で首を絞めるような演説にする積もりで、原稿も準備していたんだそうです。ところが、尾崎の前に立った議員の質問を桂が鼻先であしらい、軽蔑的な態度だったため、尾崎の怒りが爆発しました。「せっかく準備した演説を忘れ、頭越しに食ってかかった」。こう話していますが、まさにこの一言、「玉座を以て胸壁にとなし、詔勅を以て弾丸に代へて」が、桂内閣の死命を制することになるのです。

誰もが解散だと思っていました。ところが、国会は再び十日まで五日間の停会です。桂首相はその朝、外務大臣の加藤高明から「イギリスではエドワード七世の死去の際、保守党と自由党に呼び掛けて政争の一年間休戦を実現させた」。こう聞いて、解散からまた詔勅へと決心を変えたのです。二月九日、お召で参内した政友会総裁の西園寺に三度目の詔勅が出ました。「諒闇中、明治天皇の服喪中のことですが、諒闇中の政争を心配している。紛争を収拾するように」との詔勅でした。西園寺は「錦旗節刀を賜ったようなもの」と言ったそうです。錦旗とは錦のみ旗、節刀は征夷大将軍に賜る刀です。「これに背けば、切腹するしかない」とも言いました。天皇の言葉は絶対の時代です。西園寺邸に集まった政友会幹部の間にも、「仕方がない」といった無力感が漂いました。ただ一人、尾崎は大反対です。ここで不信任案を撤回すれば、政友会は護憲運動をその頂点で裏切ることになるのです。政党としての信頼を、一遍に失ってしまいます。「天皇をお諫めしてでも」と主張する尾崎に、西園寺は「他人に賜った詔勅ならお諫め出来るが、自分への詔勅には出来ない」と言います。

駆け付けた国民党の犬養は、「議会に問題が起こるたびに詔勅では、憲政上の大問題だ。たとえ国民党単独でも、既定方針で突き進む」と言って帰って行きました。原敬は日記に「党員激昂せり、畢竟桂が聖旨を仰ぎて議会を抑へ又西園寺を毒殺するものとして憲政上忍ぶべからざる事として党員大に憤激せしなり」と書いています。その頃桂は、臨時閣議を招集して、閣僚たちに朗らかな顔つきで「不信任案は撤回されるだろう」と、語っていたそうです。

国会再開の二月十日、西園寺はそれに先立って開かれた代議士会で挨拶しました。「私は臣下の分として、陛下のお言葉に従わなければなりませぬ」。まず自分の立場を説明した上で、「諸君は国民の代表者であるから、十分に意見を主張するのは当然である」。そして一時の感情による軽挙を戒め、慎重に考えてほしいと望んだのです。しかし「不信任案を撤回しろ」とは、一言も言っていません。実は西園寺は、この朝参内して政友会総裁の辞任を上奏していたのです。尾崎と犬養は体を張って護憲運動の先頭に立ち、「憲政の神様」の名を残しましたが、西園寺も負けず劣らず憲政の運用に心を配った人なのです。昭和天皇が常に立憲政治

を心がけられたのも、西園寺の教えと言ってもいいでしょう。元老として詔勅に背くことは出来ないが、憲政の常道を乱すことはさらに忍びない。西園寺は、この二律背反を自分の総裁辞任によって断ち切ろうとしたのです。「詔勅の重みは自分が一手に引き受けて総裁を辞任した。代わりに政友会がどう進むか、その行動の自由は確保した」。私は、西園寺が口には出せないゴー・サインだったのではないか、そう思うのです。

代議士会の大勢は、「バイカル博士」の異名をとる戸水寛人の緊急動議で決まりました。戸水は、日露開戦強硬論をぶった東京帝国大学七博士の一人です。「バイカル湖から東を取れ」と言って講、和条約に反対する論文を書いて東大を休職処分になり、石川県から代議士に当選していました。その戸水の「この際、全速力を以て、予定の行動をとられんことを希望します！」。この絶叫が拍手と歓声に包まれ、満場一致の議決となったのです。全員が胸に白バラをつけて、国会へ向かいました。不信任案に賛成の白票を投ずる。その決意を示そうと、夜でも目立つよう、三越に特別注文して作らせた白バラの記章でした。

国会は午後一時開会の予定でしたが、警視庁は早朝から国会周辺に六百五十人の警官を配置、厳戒態勢をとりました。それでも群衆が次から次へと押し掛け、国会を包囲していったのです。群衆を押し返そうと二十騎ま騎馬警官隊が突進すると、群衆も石を投げて応戦、怪我人が出始めました。衆議院議長の大岡育造、この人は山口県選出の政友会代議士会長でしたが、日露講和条約締結の際の日比谷焼き打ち事件を思い出していました。政府が解散を強行すれば、流血の惨事になるに違いない。それだけは何としても止めねばと、国会内の大臣室に桂首相を訪ねたのです。「今日は自分は衆議院議長として閣下に申し上げるのではない。閣下の同郷から選ばれている衆議院議員として申し上げるのだ」。こう前置きして、「今この議院の周囲は激昂した民衆に取り巻かれているのです。政府がここで解散するということにすれば、この民衆は決して血を見ざれば止むものではありません。場合によれば、これが端緒になって内乱になるかも判らん。だから切に閣下のご考慮を願う」。テーブルを叩いて辞職を勧告したのです。会談に立ち会った大蔵大臣の若槻礼次郎が回顧録に書いていますが、桂は何も言わずに黙って聞いていたそうです。しばらくして「よろしい」と言って、ポイと席を立った時に桂の心は決まったようです。あれほど政権に執着していた桂が、民衆の力に頭を下げたのです。桂が閣僚を集めて総辞職を伝えると、決戦覚悟、解散だと意気込んでいた閣僚たちは、しばらくは気が抜けたように口をきく者もいなかったそうです。桂は国会をさらに三日間停会とし、翌日の十一日、総辞職したのです。組閣から五十三日目の崩壊でした。

また三日間の停会になったことが伝わると、国会の前に集まっていた群衆の怒りは一遍に爆発しました。総辞職のための停会とは知りませんから、不信任案可

決を阻止するための強権発動だと思ったのです。東京日日新聞が「帝都は全く戦場と化せり」と報道した暴動は、目の前にあった都新聞社への投石で始まりました。「桂支持の新聞だ。やっつけろ」となって、群衆の波は次々と政府支持の新聞社に向かったのです。熱気も凄いが、血の気も相当なものでした。日比谷焼き打ち事件でも襲撃された国民新聞では、社員が日本刀を抜いて応戦、阿部という副社長はとうとうピストルで一人を射殺してしまったというのです。軍隊が出動して十二日の午前二時にやっと鎮圧しましたが、襲撃された新聞社六社、警察署十二、交番が七十六。

「毎日新聞百年史」を見ますと、この東京暴動を伝えた大阪毎日新聞の紙面が凄いのです。社会面を太い黒い罫で二つにぶち切って、その真ん中に最上段から最下段まで特大の活字で見出しを二列に並べているのですが、「憤激せる東京市民／横暴の警官良民を馬蹄に懸く／大衆雲霞の如く御用新聞社に押寄す／即死者と数十名の重軽傷者あり／軍隊終に出動す」。そして紙面の右側の見出しは、さらに大きな活字で「日比谷原頭殺気満つ／国民公憤の気凝って天を衝き／衆議院附近の群衆怒濤の如し」。騒乱は大阪にも飛び火しましたが、二月二十日に山本権兵衛内閣が成立すると、潮が引くように収まっていったのです。特定のリーダーがいたわけではありませんし、何よりも「桂内閣打倒」、この一点だけで纏った民衆運動でした。桂内閣が倒れれば、攻撃目標もなくなってしまったのです。

山県は「桂は雪隠で首をくくったようなものだ」と、冷たく言い放ったそうです。また「桂は生死の境に立ったことがないから、慢心したのだろう」とも言いました。山県ほど権力に執着した政治家はいませんが、この人は「山県の耳」と言われたくらい、よく情報を集め、時勢の変化にも敏感でした。陸軍が西園寺内閣倒閣に突き進んだ時、それが藩閥対国民、陸軍対国民の争いになるとの予感を持っていました。見通しの良い桂にそれがなかったということは、やはり慢心していたのでしょう。実は、桂はすでに胃癌に冒されていて八か月後に亡くなります。位人臣を極めた桂としては淋しい最期でしたが、この政変が政党政治への序幕となります。桂の作った立憲同志会は、憲政会、民政党と名前を変え、政友会と共に戦前の二大政党時代を作っていくことになるのです。

西園寺の後を継いで第三代政友会総裁になった原敬は、大正七年念願の政党内閣を作ります。原は藩閥を憎み、その頂点にいる山県を憎みました。「原敬日記」を見ても、「山県非難」のオン・パレードです。山県もまた大の政党嫌いでした。ところが、この長年の政敵同士が、晩年にはかなりの信頼関係になっているのです。原は首相になってから、重要な政治問題、国際問題はその都度山県を訪ねて相談し、意見を聞いています。山県の慎重な国際感覚を信頼していたからです。山県も、原の的確な判断力と鮮やかな政治手腕を買っていました。

原が六十五歳で暗殺されたのは大正十年十一月四日です。十九歳の大塚駅員中

岡艮一が東京駅で短刀で刺したのですが、すでに病床にあった山県は涙を流し、こう言ったそうです。「いま原の殺された夢を見ていた。あれは偉い男だった。あのような人物をむざむざ殺されては、日本はたまったものではない」。確かに原がもう少し生きていたら、日本の政党政治の基盤はもっとしっかりしたものになっていたでしょう。その後の日本の進路も、あるいは変わっていたかも知れないと思うと、大変残念なことでした。

それにしても、最近の日本はお金にまつわる政治家のスキャンダルが多過ぎます。「清貧」という言葉は、今や死語になってしまったのではないか、そう感ずることが再三です。原は選挙資金調達の達人でした。政友会の資金は、大体原がやり繰りしたものと言っていいでしょう。大晦日には、金がなくて年を越せない党員が、原の家に駆け込んできます。でから原は、大晦日はそれに備えて、自宅にいるのを常としていたそうです。そしてその生涯は、まさに「清貧」という言葉にふさわしいものだったのです。

苦学して役人になってからも、かなりの金欠病で、それでいて義理人情には厚く、よく他人の面倒を見ています。明治二十二年、三十三歳の農商務省参事官時代の日記には、来客に鰻をご馳走して代金八十銭をいつもの通り通帳にしようとしたところ、「今月から現金で願います」と五度も取りにきた。仕方なく友人に借りて払ったが、「余が財政不如意は今に始りたる事にあらざれども近来殊に甚だし」と書いています。首相になっても余り変わらなかったと見え、組閣の大命を受けて、参内のためエナメルの靴を履こうとしたところ、その底がすり減っていたのを多くの人が見ています。住まいも部屋数五室、大変質素なものでした。

原は五十歳の時に最初の奥さんと離婚しましたが、後妻の浅夫人は同じ岩手県出身。新橋で芸者をしていた人で、「よく出来た賢婦人」の評判が高かったそうです。家計を助けるため、古新聞や古雑誌を売って貯金していたというのです。原は常々、「いつ殺されるかわからないが、そうした時決して取り乱さないように」と言っていて、浅夫人は急報に接した時、「原が言っていたのはこの事だ」。そう思って、まず別室で気持ちを落ち着かせてから駆け付けたといいます。

実は原は、その年の二月に遺書を書いているのです。ちょうど皇太子、後の昭和天皇の外遊が決まったばかりで、右翼が「日本の皇太子が外国へ行くのはけしからん」と騒いでいましたから、何か虫が知らせたのかも知れません。私室の手文庫の中からは、四通の遺書が発見されました。一通は浅夫人と養子の貢に宛てたもので、「死亡せば即刻開披すべし」と表書きがあり、位階勲等の辞退、死亡通知や死亡広告の文案、葬式の手筈などが指示してありました。残り三通「葬式後開披すべし」となっていて、うち二通は浅夫人の生計が成り立つような細やかな配慮、生前世話になった人々への遺産の贈与や形見分けなど、いかにも原らしい行き届いた人柄をよく表わしたものでした。

最後の一通には、「政治関係分」九十七万五千円について書いてあったのです。このうち八十二万五千円は総選挙の時に受けた寄付金の残額で、「余の死後は余に継で政友会総裁たる人に選挙の場合に内密に引継ぐべし」。さらに「此引渡並に斯る金銭のあることは絶対に秘密を要す。くれぐれも漏洩すべからず。他に漏洩せば余に継で総裁たる人の迷惑たるのみならず、又他の誤解等を生ずることあるを恐るなり」。こう指示していますが、公私の別を実にきちんとした、見事なくらいに潔癖な原の金銭感覚がうかがえます。そして「但此金は一銭一厘と雖も不正醜穢の金にはあらず…余は金銭のために人の非難を受くることは終生の心掛けにて之を避くることに周到の注意をなし来りたれば、一銭一厘と雖も曖昧不正のものなし」。

残り十五万円は「原田二郎預りの通帳」となっていて、遺書にはこう書いてありました。鴻池の大番頭の原田が来て「君の財産が多くないことは承知している。今の家は借地だから立退かねばならぬことがあるかも知れないし、住宅買い入れの必要もあるだろう。そうでなくても老後になって資金がなくては困るだろう。自分は何ら君に求める所はない。ただ政治的行動に賛成するものであるから、是非受け取ってくれ」。断っても承知しないので、止むを得ず好意に対して受け取ったが、「死後はこの通帳のまま返還すべし」となっていました。

原田に返された十五万円には、後日談があります。原内閣で内務大臣を務めた床次竹二郎という薩摩出身の政治家がいます。原田の話だと、原は「内閣が倒れたら、ただ一人床次が生活に困るかも知れない。その場合の援助に使ってもよければ、預かっておくことにしよう」。原田は原の意を汲んで、十五万円をそのまま床次に贈りました。床次は「原の形見」として有り難く受け取ったそうです。どうも最近の政治家の金銭スキャンダルには、薄汚い、小ずるいといった感じのものが多過ぎます。この原敬の遺書には、清冽な、何とも言えない清々しさがあるように思うのですが、どうでしょうか。